水辺・歴史・文化を活かしたかわまちづくり

松戸市建設部　審議監　渡辺　直

1．はじめに

令和5年度「かわまち大賞」を「松戸市地区かわまちづくり」が受賞した。この機会に、かわまちづくりの取組みとその背景を紹介する。

松戸市は、千葉県北西部に位置し、東京都心部から約20kmの距離に位置する。市内には、鉄道6路線23駅があり、交通利便性の良さから、高度経済成長期に、東京の衛星都市として急激に発展した人口約50万人（令和6年6月末現在）の都市である。

地形は、東側に関東ローム層である洪積層の台地、西側に江戸川や坂川などの河川が流れる沖積層の低地となり、その高低差は約20m（**図1**）となっている。

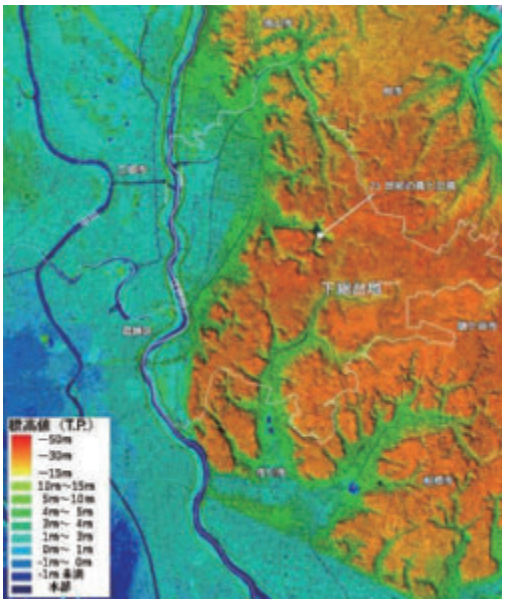

図1　松戸市の地形
国土地理院デジタル標高地形図

2．坂川の歴史

江戸川は、文禄3年（1594）から江戸幕府が行った東京湾に流れる利根川の流れを太平洋に注いだ利根川東遷に伴い、太日川（ふといかわ）を現在の江戸川の流れに整備したが、坂川も大雨のたびに低地部の新田開発地に水が溢れて大変な被害を受け苦労したことから、安永10年（1781）、鰭ヶ崎（ひれがさき、流山市）の庄屋である渡辺庄左衛門が中心となり、幕府に願い出て改修・開削が行われた人工河川である。現在の日本大学松戸歯学部裏付近から松戸宿までの第一次掘継ぎと松戸宿から栗山村までの第二次掘継ぎで約7kmが開削され、幕府に願い出てから天保7年（1836）まで、三代55年の歳月を要してようやく完成した。

しかし、明治に入っても田畑は洪水による甚大な被害を受け、坂川治水の根本策として、排水機設置の機運が高まり、明治42年、当時、江戸川流域最大で、東洋一と言われた坂川排水機・樋野口排水機場（最大排水量毎秒6.23m³）が完成した。翌年43年夏の大洪水では大きな効果を発揮し、明治44年5月、皇太子殿下（後の大正天皇）の台覧の栄を賜った。

その後、昭和になると、住宅開発などの都市化が進み、住宅地で内水氾濫が発生するようになり、昭和57年に坂川放水路、平成7年には松戸排水機場（最大排水量毎秒100m³）が完成し、坂川流域の洪水被害は大幅に軽減した。

3．松戸宿

「松戸市地区かわまちづくり」の対象地区は、JR松戸駅から徒歩5分程の旧松戸宿内の坂川沿いである。

松戸宿（**図2**）は、日本橋から五里三十三町（約23km）、千住宿で日光街道と別れ水戸街道に入り、新宿（にいじゅく）に次ぐ二番目の宿場となる。松戸宿の対岸は武蔵国で江戸に近いことから、金町側には「金町松戸御関所」が設けられ、「入鉄砲出女」を厳しく取り締まるため、江戸川には橋が架けられていなかった。関所は、藩主・幕臣などの特別な者を除き、明け六つ（午前6時頃）から暮れ六つ（午後6時頃）までの通行しか許されておらず、参勤交代の際の松戸宿は大変賑わった。

図2　「関宿通多功道見取絵図控　四巻之内　壹」のうち松戸宿付近（1800年頃、寛政～文政年間）
郵政博物館提供

（1）松龍寺の建立

文禄元年（1592）、徳川家康の五男武田信吉が佐倉領に転封後、松戸村五百石は、徳川家譜代の家臣

で旗本の高木久助広正（後に三千六百石）とその次男の久兵衛正次（後に三千三百石）の領地となった。広正は、元亀3年（1572）三方ヶ原の戦いでの武勇が伝えられているが、正次も豪傑武者で、秀忠、家光に仕えた後、現在の戸定邸の場所に館を構えたとの伝承があり、元和元年（1615）、父、広正の菩提を弔うため、館の下に「広大山高樹院松龍寺」を建立した。松龍寺の山門脇には、正次の五輪供養塔が建てられている。

（2）舟運で栄えた松戸河岸

宝永期（1704 ～ 1711）以降、銚子で水揚げされた鮮魚は、夕刻に利根川をさかのぼり、布佐（我孫子市）で陸揚げされ、鮮魚街道（なまかいどう）という陸路を馬で運び、再び松戸河岸で船に積み替えられ、日本橋に運ばれていた。水揚げから2日後の朝には競りにかけられる利便性の良さから、松戸河岸は、舟運でとても栄えた。

4．小金牧での御鹿狩

徳川幕府は、現在の松戸市･野田市･柏市･流山市･鎌ケ谷市・白井市・船橋市・印西市に跨る広域に小金牧（こがねまき）という5つの牧場を置き、野馬や害獣が村に入り込まないように村との境に野馬除土手を築いた。そしてこの地では、八代将軍吉宗が2回、十一代将軍家斉1回、十二代将軍家慶1回の計4回にわたり、百姓勢子から旗本までの数万人を動員し、江戸川には船を繋げた船橋を架橋（**図3**）、将軍の見物場である御立場（おたつば）（**図4**）を造営し、害獣駆除や幕府の威厳を天下に知らしめるための御鹿狩が実施された。家慶の御鹿狩の際は、御立場中腹に一橋慶喜（後の徳川慶喜）と田安慶頼の拝見所が設けられた。将軍等は、御鹿狩が終わると、徳川家ゆかりの松龍寺で休息を取っている。

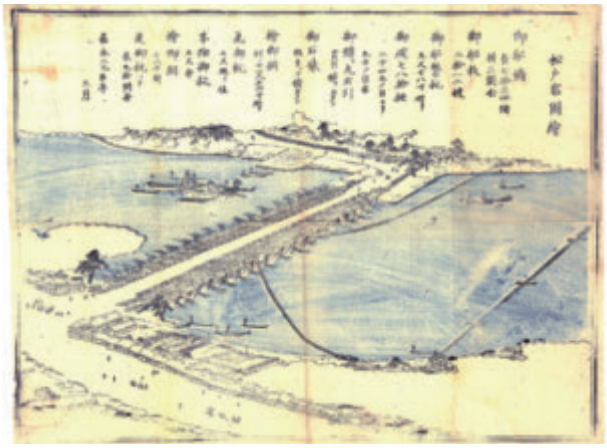

図3　松戸宿図絵　松戸市立博物館所蔵

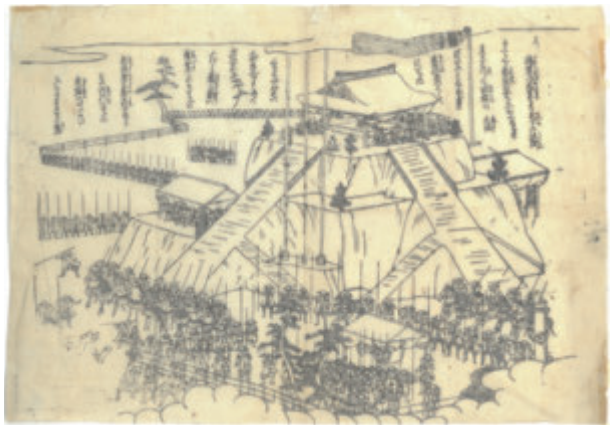

図4　かわら版　御立場　松戸市立博物館所蔵

5．戸定邸

坂川の東、戸定が丘の高台の一部は、現在、「戸定が丘歴史公園」となっている。ここには、明治17年、徳川十五代将軍徳川慶喜の弟で、最後の水戸藩主徳川昭武が、戸定邸（**写真1**）を建て暮らしていた。書院造りの庭園は、我が国最古の洋風庭園で、建物と庭園は国指定重要文化財と国指定名勝になっており、庭園からは、江戸川や富士山を望むことができる。現在は、JR常磐線で分断されているが、当時は、屋敷のある高台からくだると数分で坂川にたどり着いた。慶喜は時折、戸定邸を訪れたがその際、昭武とともに、趣味のカメラで日常の坂川の様子を撮影している。（**写真2**）

写真1　戸定邸及び庭園

写真2　坂川と徳川慶喜　　撮影：徳川昭武
個人蔵・松戸市戸定歴史館提供

6．坂川の水質浄化の取組み

昭和30年代以降の急速な都市化の進展により、生活排水が坂川へ流出した。坂川は江戸川に合流する支川で、江戸川下流には浄水場があることから、

坂川で発生する「カビ臭物質」や「アンモニア窒素」が江戸川に流入し、水道水が、「カビ臭い」「まずい」と言った不満の声が多数寄せられ、大きな社会問題となった。

こうした事から、平成6年、「清流ルネッサンス江戸川・坂川地域協議会」が設立され、平成8から12年は清流ルネッサンス21、平成14から22年は清流ルネッサンスⅡとして、水質浄化の本格的な取組みが行われた。

平成10年、国は、利根川から江戸川に綺麗な水を運ぶ「北千葉導水路」(平成12年運用開始)、江戸川河川敷に坂川から江戸川に流れ込む水を浄化する「古ヶ崎浄化施設」、浄化した水を浄水場の取水地点の下流にバイパスさせる「流水保全水路(ふれあい松戸川)」を整備。千葉県は、流域下水道、河川浄化施設を整備、「坂川河川再生事業」に着手。市は、平成4年、市と市民、民間企業が一丸となって清流を復活させ、よりよい水辺環境をつくるため、「川をきれいにする条例」を制定、公共下水道、河川浄化施設を整備。市民、民間企業は、生活排水対策、事業排水の適正処理、河川清掃や環境学習などに取り組んだ結果、平成22年には、水質目標を達成し、河川環境が改善された。

7. 坂川河川再生事業

平成13年、旧松戸宿に位置する坂川のレンガ橋から春雨橋までの延長500m区間を重点事業区間として、千葉県が「坂川河川再生事業」に着手した。この事業は、坂川の環境を回復・再生させる事業であり、計画づくりの段階から市民参加で行われた。事業の目的は、河川の水質が改善されてきたことから、水や川沿いの歴史的遺産や雰囲気を活かし、楽しみながら散策できる、川沿いをゆったり歩けるようにすること。そして多自然川づくりにより、水際は、いきものが住みやすく、人も水辺に近づくことができるようにすることである。

図5　坂川周辺の案内図

この事業で、マコモ・ヨシの植生ロールを川岸に埋め、生物が生息しやすい環境を創出したことで、魚やトンボなどの生物が坂川に戻り始めた。

8. 坂川とまちづくり市民の会の設立

平成11・12年、坂川河川再生事業の計画づくりでは、「坂川再生ワークショップ」が開催されたが、これをきっかけに、平成12年10月、「坂川とまちづくり市民の会」が設立された。市民の会は、水質悪化により一度失われた河川環境が復活したことで、河川の持つ魅力を再認識し、次世代に繋げる水と緑と歴史に恵まれた潤いのある川づくりと街づくりを、ボランティア活動を通じて進めることを目的とし、約40名(令和6年現在)の会員が在籍している。市民の会・県・市は、互いに協力し合い、他市河川の視察会、坂川再生についての意見交換などの活動を行い、坂川は市民の憩いの河川空間に生まれ変わった。そして、市民の会設立から20年以上経過した現在も、皆で定期的に河川清掃を行い、川を守っている。

9. 松戸宿坂川献灯まつり

前述の松龍寺境内にある観音堂の歴史についても紹介したい。天明4年(1784)、松戸宿内の街道裏は水田であった。稲刈り後のもみ殻の中から観音様が現れ、松龍寺観音堂に祀られた。もみ殻のことを「すくも」と言う事から「すくも観音」と呼ばれ、観音様の縁日には、観音堂にろうそくを並べて献灯し、「とうもろこし市」が立ったと伝わっている。

この市は、戦中一時途絶えたが、戦後も一つの商店会が継続してきた。しかし、平成12年頃、行事の担い手・後継者不足が深刻となった。そこで、「坂川とまちづくり市民の会」が中心となり、周辺の商店会、自治会などに協力を仰ぎ、「松戸宿坂川献灯まつり実行委員会」が組織された。

平成18年、古より地域に伝承されてきた参詣文化を尊重し、清流となった坂川に「あんどん」を並べ、「灯籠流し」や昔ながらの縁日が並ぶ「第1回松戸宿坂川献灯まつり」(**写真3**)が開催された。その後の献灯まつりは、コロナ禍で一時開催自粛の時期はあったが、令和5年は、第16回が開催され、8月9･10日の両日で約3万人が訪れ、夏の風物詩となっている。

写真３　松戸宿坂川献灯まつり

10. 松戸宿河津桜まつり

平成17年、里親制度で市民からの寄付を集い、坂川沿いに37本の河津桜を植樹した。それぞれの桜には、ご寄付いただいた方々のお名前プレートを設置することで、身近な河川への愛護の意識が更に高まった。平成22年には、坂川が河津桜で美しく彩られ、「松戸宿坂川献灯まつり実行委員会」主催による「第１回松戸宿坂川河津桜まつり」（**写真４**）が開催された。こちらも、令和５年で第11回目となり、川に枝垂れるように咲く花を愉しみに多くの観光客が訪れた。

写真４　松戸宿坂川河津桜まつり

11. 春雨橋親水広場

平成29年、市は、春雨橋付近に、地域のランドマークとなる「春雨橋親水広場」（**写真５**）を整備した。広場には、イベントの開催を見越して、ウッドデッキ、芝生広場、キッチンカーの駐車場などを整備し、川沿いにライン照明を配して夜景のアクセントとした。これにより、それぞれのまつりにステージイベントが加わり、また、新たなイベントも開催されるようになるなど、更なる賑わいが生まれた。

写真５　春雨橋親水広場

12. 令和５年度かわまち大賞受賞

令和５年度「かわまち大賞」を「松戸市地区かわまちづくり」が受賞した。（**写真６**）これは、「河川が持つ水と緑の空間と宿場町の歴史的価値を結びつけて、水辺を中心とした都市再生につなげている。」「水質改善の取組みを契機に、河川清掃や並木整備、イベントの実施が継続され、目の前の川を守り、育てていく姿勢が見られる。」「坂川沿いの春雨橋親水広場はデザイン性に優れ、対岸と対話可能な一体的空間を形成している。」などの評価をいただいたことによる。この名誉な賞を授与いただき、市民の会からは、「大変喜ばしく思うとともに、一層の活動が求められるので、次世代の後継者に胸を張って引き継げるよう関係者一同精進してまいりたい。」とのコメントが寄せられている。

写真６　国土交通大臣室での受賞式

13. おわりに

高度経済成長期に大きく発展した本市は、現在、松戸駅周辺の都市機能の更新時期を迎えている。令和３年９月、松戸駅周辺地域が都市再生特別措置法に基づく「都市再生緊急整備地域」に政令指定され、現在、松戸駅の改修や駅ビルの建設が進んでいる。今後、松戸駅周辺の公共施設の建て替えが計画されており、民間活力を中心とした都市再生が推進されている。また、松戸駅周辺の賑わいの創出、人々の交流や滞在者の増加による地域の活性化を図るため、これまで築いてきた旧松戸宿の坂川の水辺空間や歴史的価値を活かし、ここでの賑わいが松戸駅周辺に滲み出るよう、新たな計画が進行している。

まずは、坂川沿いの河川管理道路の景観整備を行い、それに加えて当該地域に特色あるコンテンツの集積を図ることで、恒常的に人を引き付ける魅力を創出するものである。

なお、こうした取組みに加え、「景観10年、風景100年、風土1000年」という言葉があるように、江戸時代の文化をまつりという形に変化させ、次世代へ繋いでいく地域の活動が、活力ある本市の創造に寄与するとともに、人々の心象に残り発展していくことで、やがて風景となり風土となろう。